

俳句雜誌



空

令和3年9月25日発行

第19巻4号

通巻第98号



2021・9

SORA 98号

福岡 三井所美智子

収まらぬ疫病や庭の薔薇真つ赤
佳き香して母が出かくる春裕
刀鍛冶の立派な墓や囀れり
菫替への途中や花の京都御所
箱で来る米寿の姉の走り諸

北九州 横田敬子

囀や草もて拭ふ靴の泥
あの頃の見舞は玉子昭和の日
信心の山の水汲む青葉木菟
草を抜く海老のごとくに腰曲げて
丈高き休耕田の草を刈る

東京 今井康子

不自由と自由を得たるマスクかな
友達ができたと戻る一年生
花屑を掃けば箒に花の舞ふ
大空を清めて櫻若葉かな
墓穴を出しと庭より夫が呼ぶ

兵庫 大西乃子

番号で呼ぶ診察や春愁
囀や揃ひの赤きティーカップ
桜蕊ふる実りなき恋いくつ
軽鳧の子のふらりと列を離れけり
青鷺の佇ちみる水の暮れはじむ

大阪 田岡千章

目力といふは希望ぞ入学子
四月馬鹿語呂を合はせに薬の名
たんぽぽや土管の秘密基地廢る
紫木蓮吐息を洩らしをんななり
春の宵妻をどこかに置き忘る

神奈川 窪みち子

蛩烏賊見しより藍の空明るし
菜種梅雨敷石黒き艶放つ
苺摘む病持つ子の明るくて
鈴蘭の朧十五の日記より
じやんけんで上る石段椎若葉

岡垣 田中とし江

花びらに即かれて退る水澄まし
すり鉢の出番の多き遅日かな
父が掘り母の和へたる浜苦菜
土笛は祈りの音色浜万年青
ハイヒール流木にのせ磯遊び

東京 山田正子

母恋ひやはうれん草の赤き根も
かたつむり或る日は急ぐこともあり
牛飼は牛さんと呼ぶ蓮華草
暮るるまで考へてゐる守宮かな
糸桜雨の重みを負ひにけり

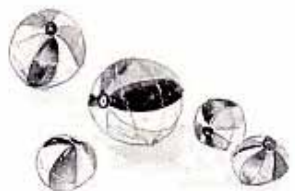
夜雨去りし幹の黒さよ朝桜

見えをりし桜消えたり朝の霧

つむじ風にくるくるくるくる花の塵

掃き寄せて又掃き寄せて花の塵

敦煌の昼の真闇よ黄砂降る



空集作品評

柴田佐知子

鞆漕ぐ異国の船をぼんと蹴り
水中に孵化の汚れや夏に入る

高倉 和子

//

一句目、〈鞆漕〉を漕いで何かを〈蹴る〉という句が無いわけではない。よく見るのは〈空を〉とか〈雲を〉など。ところが掲句は〈異国の船を〉と焦点を絞っていることで、景が鮮明となり且つ穏やかな春の海も広がって来る。〈ぼんと蹴り〉の平仮名表記もいい。ペリーの黒船もぼんと蹴っているような想像が浮かび楽しい。中七下五の手毬唄のような調べが上五に戻り、春景色の中にぶらんこが揺れる。

二句目は目高や金魚の水槽か自然の中の景かは分からぬが、卵を破って水中へと動き出す命。作者はその水に濁りを見たのである。〈孵化の汚れ〉と言い切ったことに驚く。ここで注目すべきは季語の力だ。〈汚れ〉という負の印象が〈夏に入る〉によって一気にひっくり返される。〈汚れ〉の中に躍動する小さな生命と初夏の自然とが響き合い、脈打つような作品となっている。

闇といふ大きな投網植田村

原 友子

田植という大きな作業を終えた村は、ひと時の安堵の中に在るのだろう。闇に包まれた静かな植田村。〈闇といふ大きな投網〉という比喻によって、その闇は更に濃くなる。農耕民族の原初の闇が下りてきたような奥行きさえ感じさせられる。

一寸の隙間もあらず蟻の列

石橋 幾代

大して目標が定まっていないうようなときは、蟻は勝手な動きをしているが、列なしているときは、たどってゆくと虫の骸や菓子屑の屑に行き当たる。

さて掲句、〈一寸の隙間もあらず〉と数字を呈示したことで、個々の蟻が浮き上ってきて景がよりリアルになっている。

〈蟻〉や〈遠足〉というとすぐに浮ぶ言葉の一つは〈列〉であろう。「見て、感じて、作る」と言われても、蟻が列なして進んでいるところを詠むと、似たような句になる。吟行句会で似たような句どころか全く同じ句が出ていたことを何度もあった。しかし同じような語彙でも、そこで引き下がってはいけない。見えずように見るとき、小さな発見や表現を得ることができるのだから。育代さんの句のように。

空集抄 柴田佐知子抄出

鞆漕ぐ異国の船をぼんと蹴り

高倉和子

水中に孵化の汚れや夏に入る

”

闇といふ大きな投網植田村

原友子

夜の新樹祝ひ袋をポケットに

戸栗末廣

星の出るころや泉へけものたち

深川淑枝

一寸の隙間もあらず蟻の列

石橋幾代

一月の付録のやうに二月来る

角野良生

黄金週間シェフの前掛け蝶結び

星加鷹彦

見渡してまづ場所覚え茸狩

中田みなみ

思ひきり跳んで目を剥く睦五郎

松田明子

住職に知らぬ人無し夏蜜柑

吉田 稗

葉桜や四の五の言はぬ男欲し

永淵恵子

浮人形すぐ諦めて浮き上がる

苑 実 耶

店員は売物を着て夏に入る

今井康子

藤に藤被さつてゐる切り通し

曾根富久恵

初夏や抱きし赤子に見つめらる

西住三恵子

忘れてもいいことばかり夜の秋

山本則男

昭和の日指一本で風呂が沸く

えとう樹里

古書に染む煙草の匂ひ梅雨に入る

青木朋子

流木の芯まで白し春の鳶

田中とし江

もどかしきダイヤル電話春の昼

井上和子

休日の午睡許してくれる子よ

仲里奈央

きりぎりしやんと一重瞼の山桜

山田正子

塗り畦と山壁の雪光り合ふ

窪みち子





吾を叱るは姉だけとなり桐の花

岩下きぬ代

鶯の声聞いてゐる始業前

吉田悦子

獲物引く購につきゆく蟻もをり秋

秋千晴

湧き水に砂の勇躍夏来る

田岡千章

余生など無きかに母の更衣

林徹也

食細くなりたる夫へあさり汁

三井所美智子

草笛は淋しき音色誰が吹くも

石川子熊

はり紙にやさしき字ありつばめの巢

松井順子

過疎の村だあれも取らぬ夏みかん

横田敬子

星見れば蜜柑の花の降つて来し

河原敬子

鮑海女岩くぐるとき魚となり

坂口学

眩しくて頭の重くなる春の庭

林れい

自転車を寝かせて浴ぶる花吹雪

日高孝

薫風を味方につけて逆上がり

畑由子

みどりの日お掃除ロボの名はよいこ

後藤園子

シャボン玉子犬の鼻で弾けたり

牧康子

一睡の昼寝そのまま彼の世へと

押田裕見子

青あらし夜も戸を開け駐在所

兒玉充代

囀の中や耳鳴り忘れをり

佑藤和弘

方言の飛び交ふ市場初鯉

倉智万数雄

口広げ風すべて吸ふ鯉のぼり

石井みゆき

城堀に日差しの移る春の鴨

大西乃子

兄弟のいさかひ続く里神楽

あさなが捷

一言も返すすべなし秋の風

田口萬智子

閉校や葉桜の影島の影

立花一枝

蔦竹葉生きているよと友が来る

杉本みどり

空集

柴田佐知子選



鞆漕ぐ異国の船をぼんと蹴り

福岡 高倉和子

揚雲雀風に押されてずれにけり

折詰の底の湿りや花の昼

膝崩すまでのやりとりあたたかし

水中に孵化の汚れや夏に入る

疾走の頃の若葉よふるさとよ

交渉の果ての戦や夏の月

じやがたらの花やゆつくり雲流れ

筍置く土間に原初の匂ひ満つ

剥き捨てし筍の皮まだ温き

千葉 原 友子

地下足袋の破れは縫はず行々子

町までは隧道三つ花卵木

黒潮の帯あをあと孕馬

葉ざくらの風のかよへる猷血車

一日のはじまるトマト齧りけり

花ざくろきれいな言葉返りけり

夏鶯川の底ひの晴れわたり

夜の新樹祝ひ袋をポケットに

青鷺の水平の脚頭上過ぐ

黄雀風石垣に打つ石くさび

雨のあと川なまぐさき芒種かな

風も水も青きにほひや草蚩

星の出るころや泉へけものたち

北州 深川淑枝

広島 戸栗末廣